田代よいとこ－その19－　江戸時代の田代

田代村の”独立”

以前に学校だより（平成２６年度１月号）で、田代城について紹介しました。ご記憶の方も多いことでしょう(ごらんになりたい方は是非ご来校ください。職員室前の廊下に掲示してあります)。じつはあの時代（戦国時代末）には、田代は上川入村の中の角田の一部だったのです。さらに江戸時代に入ってもまだしばらくは角田の一部でした。分村したのは『新編相模国風土記稿』によると延宝2年(1674:当時の徳川将軍は4代家綱)、今から約340年前のことです。

ちなみに愛川中学校の一角に八幡神社がありますが、あれは城の守り神として、田代城主・内藤氏が角田村の八幡神社を分祀したものです。

田代の草分け

田代に古くから伝わる言葉に「田代十三苗字(みょうじ)、十七軒」というのがあります。江戸時代初期・慶長の水帳（＝江戸時代の土地台帳　1603)によると、お縄請(なわうけ)百姓(検地の結果、年貢を割り付けられた百姓)が17人記載されていますが、この「田代十三苗字、十七軒」が田代の草分けというべき家々です。大矢、新井、伊寄(いより)、荻田、大貫、高賀(こうが)、小座野、斎藤、佐藤、奈良、花上、古郡、山口の十三苗字で、このうち大矢が二軒、荻田が四軒あったので、十七軒となります。

『見後集』という大矢俊介氏所蔵の記録によると、「大矢岩見と申す北条より付人にて、ここに(田代城)相勤居候ところ、落城以後は田代村名主相勤候。その時分百姓**非**(稼ぎ)十七軒・・」とあり、裏付けられます。この十三軒が田代河原を徐々に開発しながら村づくりを進め、17世紀中に今の姿に近い田代の基礎を作り上げました。宝永３年(1706)の『田代村差出帳』<註1>によると家数は１09軒、人数は595人となっています。領主は旗本の太田氏で、初代の太田政資から明治維新まで１60年間太田氏の領地でした。

降って『新編相模国風土記稿』<註2>の記載によると、民戸98。さらに『相模国寄場組合明細表』（天保14年：1843）<註3>によると家数77戸、さらに25年後の明治元年(1868)の田代村『村高家数人別書上帳』には、家数は86軒、人数は433人となっています。半原在住の郷土史家・民俗学者：大塚博夫氏は「天保期からの家数減少が何を意味するのか興味のあることです」と述べてます。

★註１　『田代村差出帳』によると、職人が13軒、商人が8軒となっている。職人は紺屋3軒、大工5軒、指物師1軒、木挽き2軒、鍛冶屋2軒で、商人は槇丸太売商1軒、絹綿売商5軒、請酒屋2軒。「造酒屋なし」とあり、現在の大矢孝酒造はまだ創業していない。

★註２　当時の田代の小名(こな＝小字(こあざ))として、平山、上ノ原、小峯、関場、西ヶ谷、西原、鍛冶屋原、サルソウ、上田代、下田代河原が出ている。

★註３　寄場組合とは、文政10年(1827)江戸幕府の方針で、関東全域に設置された自警組合。交通の便利な村を寄場(よせば)と呼び、その村を中心にした40～50ヶ村で組合を作り、治安維持、流通統制に当たった。相模国では14の寄場組合村が設置され、田代村は厚木村を寄場とする厚木寄場組合村(所属村数49で相模国最大規模)に所属した。

【参考文献】
「愛川・私のふるさと」（大塚博夫『愛川町農協三十年史』
愛川町農業協同組合　昭和５３年4月）
『村と人－江戸時代の愛川－』（愛川町教育委員会　1996年3月）
『新編相模国風土記稿』（江戸幕府　天保年間＜1840年頃＞）
『愛川町郷土誌』（愛川町教育委員会　昭和57年3月）

お願い

風光明媚な田代地区では、かつて映画やテレビのロケが何度か行われたとか。それに関してなにか情報をお持ちでしたら、教頭までお知らせください。また、引き続き愛北劇場（映画館）の写真も探しています。こちらの方もおわかりでしたらお教えください。よろしくお願いいたします。